

トラップ

岡本俊弥

目の前に何かがあった。

晴れた暑い日だった。まだ朝の通勤時間帯だというのに、陽は容赦なく照りつけている。汗を気にしながら、麻衣は駅まで早足で歩いていた。いつもより家が出るのが遅れて、もう時間ぎりぎりなのだ。

角を曲がればあと少しで駅、という所で何かにぶつかった。硬いものではない、マットのような柔らかい何かだった。

衝撃はなかったが、麻衣はそのまま尻餅をついた。

え、なに。

だが、通行人が忙しく行き交う歩道はいつもと変わらない。倒れた麻衣に視線を投

げる者もいたが、誰もかまってはくれなかった。

立ち上がって歩こうとしたが押し返される。奇妙な感覚だった。確かに何かがある。壁のようだ。どこにも見えないのに、歩こうとすると進めないのだ。

進めないのは麻衣だけだった。

周りの人々は、次々と追い抜いていく。

「どうかされたのですか」

何かに触れようと手を動かしていると、声をかけてくれる人もいた。

「あの、ここに……」

気が動転していることもあり、うまく説明できないうちに、気味悪げな表情を浮かべられるのだった。

だめだ。

通勤を急ぐ群衆は、麻衣を避けるように遠巻きに歩き過ぎていった。

どうしよう。

汗が噴き出してきた。スーツの背中までじっとりと濡れていた。目の前の駅を見つ

め、麻衣は呆然と立ち尽くした。

*

日常がいそがしいと、細かなことにまで目が回らない。

そういえば、今朝はごみ箱の底に溜まっている小さな埃が気になった。慌ただしくごみをまとめたとき、こびり付いたままの灰色の綿埃が明瞭に見えたのだ。髪の毛なのか、混ざり合った繊維なのか。触ろうとすると、まるで溶けかかった氷のように消え去ってしまった。

マンションに戻り、リビングの椅子に座ると、どうでも良いことばかりが思い出せた。自分の家というだけで人心地がつく。室内には誰もいない。夫は、いつも麻衣より先に家を出る。

「……体調が良くなって、休ませていただきたいのですが」

「体が悪いのじゃ仕方ないわね。ちゃんと医者に行って診てもらいなさいよ」

電話の向こうで、上司は不機嫌そうに言った。

「でも、明日は、なんとか出てきてね」

麻衣が任されている書類の締め切りは今日だった。これから会社は繁忙期に入る。部門の人員はぎりぎりですぐで余裕がなかった。

「もうしわけありません……」

切れていた。

明日か……行けるかな。手のひらに汗が滲んだ。

職場での麻衣の立場は微妙だった。今期の評価が低いと年度の査定に響く。勤続十年を超え、二年前に主任になってからは、年俸制に変わったのだ。年収は前年の成果で決まる。成績がふうなら据え置き、下手をすると減額で終わる。まだ昇給したことがない。

なんとか体調は戻ったような気がする。でも、本当にそうか。駅に行けないのは、自分のどこがおかしいからではないのか。

医者ってどこに行くの。

こういう症状、状態を、どうやって説明したらいい。

いろいろなことが頭に浮かんで空回りした。

仕事中の通話は嫌うのだが、亮に相談しよう。帰ってくるのを待ってられない。呼び出し音がしばらく続いたあとに、小さな声で返事が聞こえる。

「……なに」

麻衣は小学校から高校まで、自分の部屋を持ってなかった。

いつだったか部屋がほしいと、親に訴えたことがある。祖母は味方してくれたが、そんな余裕はないと取り合ってもらえなかった。

大学に入るとき、この都市に引っ越してきて、ようやく一人住まいができた。大都市圏では家賃が高い。狭苦しい賃貸だったが、何とか卒業まで我慢した。奨学金は学費で消える。どんなにバイトをしても、自分が住みたい部屋の家賃を満たすほどの稼ぎにはならなかった。

卒業するとそのまま就職した。転勤族だった両親の住む実家にはなじみがないし、どうせ地方での仕事は限られた。

正社員の初任給は悪くなかった。だが、まだ中途半端だった。望んだ収入には届かない。

仕事は思ったより厳しく、毎日遅くまで働かされた。その割に給与は増えなかった。そんなとき亮と出会った。五年前だ。はじめから結婚しようと思ったわけではない。同棲でもかまわない、二人ならお金の苦労が減ると考えたからだ。

その点、亮はあっさりしていた。

同棲より結婚の方が、すべてをシェアできて無駄を省けるんじゃないか、そんな話をした。特段好みではなかったが、亮は素直な性格だった。お互い干渉し合うこともなく、平穩に過ごせるだろうと麻衣は思った。

好き嫌いはささいなことだ。実利を優先する方が合理的だろう。

結婚してから分かったのだが、亮の年収は麻衣と変わらなかった。亮は家計に興味がなく、およその予算を立てるだけで生活してきたようだ。漫然とした支出が多く、貯金も数十万ほどしかない。とはいえ、二人合わせれば、ある程度の賃貸マンションが借りられる。二人だけなら十分な広さがある。子どもを持つ計画はなかった。

「心療内科にみてもらったら」

ひととおり訴えを聞くと、亮は抑揚のない声で言った。

「ええ、でも」

「体が悪くないのに動けなくなるんだろ、だったら心療内科だろ」
亮は当たり前のことのように言う。

「そこに一人でいくのは」

「おれが今から帰っても遅くなる」

「うん……」

検索してみると心療内科を掲げるクリニックは、家から駅に向かう道を逆方向に行つたところにあつた。

「わかったよ、いくよ」

仕方がない、いくしかない。

外来受付は午前中までで、気がつくとき十一時を回って昼に近かった。そのままの格好で、あわてて病院に向かった。

クリニックまで二キロほどの距離にある。少し離れているが、いまからタクシーを呼ぶより、歩いた方が早いだろう。だが、道に出ると気温がさらに上がっていて、耐えがたいほど暑かった。

人通りはほとんどなかった。平日の住宅街は通行人がもともと少ない。

あと、ちよつと。

スマホを見たが、強い日差しの下では、地図の詳細まで分からなかった。

がくと衝撃がきた。

立ち止まり、辺りを見回しながらだったから、ふらついただけで済んだ。

同じだ。硬くない、マットのような柔らかい何か。

手探りで分かった限りでは、生活道路を横切る形で、見えない壁が行く手を遮っていた。それは人家の庭から、さらに向かいの庭を越えて続いているようだった。

*

「いかなかったのか」

「いかなかったじゃなくて、いけなかった。いこうとしたんだから」

「べつに疑ってやしない」

「じゃあ、そんな言い方しないで」

帰ってきた亮相手に、しばらく口論のようなやりとりをした。

時間は夜の十時になっていた。いつもなら、二人ともこのぐらいの帰宅時間になる。

「つまり、駅にも病院にもいけないということか、困ったね」

麻衣はその後、気分が悪くなって自宅に戻ったのだ。住宅街を貫く道路を一キロ余り、この範囲にはコンビニもない。駅前にはあるのだが、そこまでは行き着けないのだ。冷蔵庫にあった飲み物だけを口にして、ソファで休んでいた。

汗だくで目が覚めた。

夏の夕暮れも過ぎていて、窓の外はすっかり暗くなっていた。居眠りのつもりだったのに意外だった。

食事はあり合わせで済ませた。平日は二人とも外食することが多い。帰ってからで

は遅くなり過ぎるからだ。

「メンタルかも知れないけど、医者にも行けないんじゃないな」

亮はいつもの口調でしゃべった。

「どうしたらいいの」

「休んでたら」

「休めば治るの」

「おれに分かるわけないだろ」

「なんでそんな言い方になるの、本気で心配してくれてるの」

「じゃ、どう言えばいい」

また口喧嘩になった。だが、そのうち亮は不機嫌になって黙りこむ。

ふだん争いになるほどの会話は無い。亮が自室にこもれば、お互い干渉もなく静かに暮らせる。そういう仲でいいと思ってきた。二人の収入は麻衣が管理して無駄な支出を省く。お互い縛られない生き方をする。

でも、それは何もないときのことだ。

いまは、亮はもちろんだが、麻衣にも何が起こったか分かっていない。何とかしないと、収入をいくらか失うだけではすまないかも知れない。

「もういい。言い合ってたって解決しないんだから」

振り捨てるように言うと、亮は逆にほっとした顔をする。

これでは無理だ。

亮にとって他人ごとでしかない。夫には頼れない。麻衣には、諦観めいた感情がわき上がった。

亮はシャワーを浴びた後、疲れているからと寝室に入ってしまった。

午睡というには長く眠った麻衣は、まだ寝る気にはなれない。タンスからウォーキング用に買ったトレーニングウェアを引っ張り出した。一年くらい前に、始めようと思っただけのもの、数日でやめてしまったものだ。シューズも靴箱にある。

こんな時間に出歩くのは気が引けるが、夜中に歩く人はさほど珍しくない。都会ならありだろう。

小型の懐中電灯を手に持ち、キャップを被って出た。

まだ暑い。熱帯夜か。

スマホに地図を表示させて、歩き出した。今度は、通勤路に直交する同じような生活道路だ。マンションを出て、しばらく歩き十字路を右に折れる。方向からすると、鉄道の線路と並行に走る道になる。

街灯が等間隔で続く夜の道だ。夜半を過ぎた時刻なので、昼間に輪をかけて誰もいない。ウォーキングのつもりになって、早足で歩いた。

衝撃がきた。

手に持っていたライトとスマホを落としてしまったが、倒れるまでには至らなかった。少し油断した。これまで二回と同じだった。見通しがよく、ずっとむこうの街灯までがよく見える。何かがある気配すらない。

転がったライトもスマホも、傷は付いたが幸い壊れてはいなかった。地図を表示すると、現在位置が分かる。

同じくらいの距離だ。

自宅を中心として徒歩十五分くらいに、目に見えない障壁がある。まだ道路上の三

カ所しか確認できていないけれど、どの方向にもあるのではないか。

麻衣は手を広げて、障壁の形を探ろうとした。硬いものではないが、手を押し込める柔軟さもない。のっぺりとした感じで、高さは少なくとも身長よりはる。手探りしながら横に歩いて行っただが、住宅の塀より先は分からなかった。

たぶん、同じなのだろう。

その後麻衣は、できるだけ脇道に入って、壁の存在を確かめていった。どんな小さな道、行き止まりの道にも、麻衣だけが通れない壁があった。地図に次々とマークを入れていくと、それはカーブを描いていた。自宅を中心とする円周になっていた。

そう分かることで、麻衣は奇妙な達成感を得た。

ばかじゃない。

息を吐きだし、自分で呆れる。

だからって、何かがほんとうに分かったわけじゃないんだから。

汗でウェアが不快になると、麻衣は自宅に戻った。

熱いお湯を入れて湯船につかり、上がってから冷蔵庫にある亮の発泡酒を飲んだ。

疲労なのか、心労のせいなのか、めったに飲まない酒はよく回って気分が良くなった。

ソファに寝転んでうたた寝をしていると、横に誰かが座った。亮だった。

「おはようって、まだ早いよね」

寝ぼけたまま時計を見ると三時だった。

「どうしたのさ」

すると、亮は肩に手をかけてきた。

「なによ、めずらしいじゃない」

体を預けてくる。

「したいの」

二人ともセックスには淡泊だった。結婚した当初から関心は薄かったし、最近は関係自体がない。仕事が忙しいときは、そんな気分になれないことが多かった。夫婦のセックススレスレって、こんなもんなんだと麻衣は思っていた。

「へんな奴、喧嘩したのに」

酔いも回っていて、ためらいもなく受け入れたが、本当に覚醒していたのかどうか

憶えていない。

意識のずつと向こうで、誰か知らない二人が抱き合っている。

ふだんなら喋らない亮が、耳元でぶつぶつとつぶやくのだ。

「きみは、えらばれたんだよ」

「え、なんて」

「とらるふあまどおるせいじんにえらばれたんだ」

「あはは、変な名前ね」

「きみは、もうにげられないんだ」

「どういう意味、亮から逃げられないって意味」

「えらばれたから」

「わけわかんないよ、何がよ、はっきり言いなさい」

すると、目の前がぐるぐる回り始めた。

麻衣は車の助手席に座っている。

ああ、買い物に行くのだ。気分がすこし良くなる。

運転席を見るのだが、だれが運転をしているのか分からない。

スピードが出ている。風景は見る間に移り変わっていく。

まだなのかな、と声をかける。あ、でもここは。

何かを思い出しそうになる。

目が覚めると、ソファの上でそのまま寝ていた。

エアコンは切れており、室温が三十度以上上がっていた。また汗だくだ。もう陽は高かった。テーブルには発泡酒の空き缶や、バスタオルが散らかっていた。亮はいなかった。

テーブルの上のスマホには、会社からの着信履歴が何件も残っていた。最後にショートメッセージが入っていた。

「どうして電話に出ないの、無断欠勤は認められません。出社時には必ず医者診断書を提出のこと。いまの仕事は別の担当に割り振った。以上」

上司からだった。メッセージの内容から、深刻にまずいと思った。しかし、たった一日のことなのに、昨日ほどの焦燥感は湧いてこなかった。

焦ったところで、どうせ会社には行けないのだ。

これは誰にも頼れない、自分で解決するしかない。

シャワーを浴び、ウェアは洗濯機に放り込んだ。替えがないので、室内着のジャージを着た。まだ調べることがある。昨日の夜と反対側も見えておかないと、仮説が正しいかどうか分からない。

長袖のTシャツを着て、タオルを首に巻きエントランスを出た。ふだん見かける隣人は誰もいない。住宅街の道路は、通勤や通学時間を外すと、離れた大通りの騒音が小さく聞こえるくらいで静かだ。暑い日だ。朝方に済ませてしまったのか、掃除をする人の姿もない。

昨夜と逆の方向に歩きはじめる。今度はおよその限界点分かっている。

早足で歩き、十数分で目的の通りが見えてきた。まばらだが、車が走っている。歩みを緩め、手を差し伸べるようにして進んだ。特に何も見えない。

だが、壁はあった。

十字路にかかる手前だった。昨日と全く同じ感触があり、先に進めない。横歩きで

輪郭を確かめていく。すぐに住宅のフェンスがあつて途切れてしまう。

一つ一つの脇道に入り、順番に確かめる。

思っていたとおり、自宅を中心に、半径一キロ半ほどの円形の壁がある。

ときどき、車がその壁を突ききって走って行く。これは、麻衣だけを排除する壁なのだ。車に自分が乗っていたらと想像するが、あのスピードで壁にぶつかると思うと試す気にならない。

これから、どうしよう。

予想どおりだと分かってても、次にすることが思いつかない。

惰性で次の脇道に入った。そこは行き止まりのようだった。両側を石積みの塀に挟まれ、奥はスチールの扉に遮られている。

見たことがある扉だった。

直射日光に照らされているので違和感があつたが、その扉は、麻衣のマンションの玄関にあるものと同じなのだ。深いグリーンに塗られ、郵便受けはない。一見高級そうに見えるが、どこにでもある集合住宅用のドアだ。しかし、それは住宅の塀に付い

ているのではなく、見えない障壁が存在する道路の真ん中にある。

開くのか。

ちよつと待て、壁と一体ということは、たぶんわたしにしか見えないドアだ。開けていいのか。

ドアノブに手をかける。鍵はかかっていない。ゆつくりと引く。すつと、冷たい空気が流れ込んできた。

部屋だった。広いリビングで、中央に掘り込まれた一面があり、円周状にソファが置かれていた。正面は壁面全体が巨大な窓だった。森林が見えた。その向こうに海なのか川なのか、水面が陽光を反射していた。アメリカ映画でよく出てくる、大富豪のリビングにそっくりだった。室温は低く設定されており、空気は乾いていた。

麻衣はドアを抜けると、ふらふらと室内に入ってしまった。

土足でいいんだっけ。

高級そうな絨毯が敷かれていた。

人の気配はない。来客を待つリゾートホテルのように、埃一つなく掃除されている。

ソファまで行くと、少し遠慮がちに座ってみた。革張りで、深く沈み込んだ。うちとはえらい違いだ。

天井全体がやわらかな照明になっていた。自分のものを含めて、影は一切なかった。部屋には、いくつかのドアがまだあった。

立ち上がると、一つを開いてみた。そこはキッチンで、大きな冷蔵庫やレンジが備えられている。引き出しを開けると、さまざまな調理器具や鍋が整然と収納されている。そこだけでも、麻衣のマンションくらい広かった。

欧米スタイルの浴室、衣類でいっぱいクロゼットや、見たこともない大きなダブルベッドのある寝室もあった。衣装を一着を手にとって丈をみたが、衣類はすべて麻衣の体格に合わせたサイズのようにだった。女性ものしかなかった。

ここは、わたしのための部屋みたいだ。

いや、そんなわけがない。

急に不安になって、入ってきた最初のドアを開いた。すると、来たときにはなかった広いエントランスがあり、さらに外に続くドアがあった。

ラッチを押し下げると、ドアは問題なく開けられた。

コンクリートの狭い通路があった。

麻衣の自宅のすぐ外、賃貸マンションの通路なのだった。

戻ってきた、というか、わたしのもともとの家はどうなったの。慌ててスマホの地図を出そうとしたが、圏外表示になっている。

昨日亮がつぶやいていた言葉が急に思い出された。

……きみは、もうにげられないんだ……

*

袋小路にあったドアを開いた瞬間が、スイッチになったのかも知れない。たぶんあのときから、麻衣のスマホはあらゆる電波を捉えられなくなった。

たいしたものではなかったとはいえ、個人の持ち物は一切が失われた。愛用の衣類も、

靴も、化粧品も、小物類も、使い慣れた家電もテレビもパソコンも。

それを言うなら、もっと大事な財布やクレジットカード、銀行カード、社員証、交通カード、ポイントカードも、自宅もろとも消滅した。持ち出せたのは、小銭入れと部屋の鍵だけだった。いまの部屋に鍵が合うのかどうかは知らない。

ここは、なんだ。

麻衣は椅子に座り込み、必死で考えた。ソファでは眠ってしまいそうだ。キッチンからスツールを引きずり出して、リビングの壁際に持ってきた。

一昨日までは何の徴候もなかった。けれど、少なくとも昨日の夜、亮は何かを知っていた。何だっけ、とらるふあまどおる……外国語なのか。

頭を抱えて、外を見た。否応なく見えてしまうパノラマビューだ。

窓からの風景は本物だろうか。まるで自然公園のように、人工物が見られない。建物も道路もなく、森林が視界を埋め尽くしていた。針葉樹が多く、北の原生林を思わせた。どこにも雪がないから、いまはたぶん夏なのだろう。

と、視界の端で動くものがある。

湾だか湖だか知れぬ水辺に何かがいる。この家は高台で、水辺まではかなりの距離があった。だが、針葉樹の樹冠より何倍も高いものが上陸しようとしている。

無数の触手のような足が体を支えている。ひよろりとした首と頭……というか、動物の頭らしくない。長い茎を持つ植物に似ている。頭に相当する部分は、まるで花のつぼみに見えた。そう思うと、足というより根のようだ。根がゆらゆらと蠢きながら進んでくる。

巨大な動く花、でも、咲いてはいない。

麻衣はまだ非現実感が抜けない。

しかし、動く植物はこちらに向かってくる。ゆっくりに見えるが、大きさからするとかなり早い。

逃げた方がいいのか、逃げるって玄関から出たら逃げられるのか。

だが、そうしたところで、どうせ壁の中だ。

麻衣は動かなかった。スツールに座ったまま、迫ってくる巨大な存在を見つめていた。触手や葉に相当する部分の、微細な動きに魅入られた。でたらめに動いているよ

うではない。その一つ一つに意思があると思えた。恐怖は感じない。

巨大なものの動きは、コマ落としのように離散的だった。一瞬一瞬の時間の経過と、接近する動きとが一致しない。何度も何度も、近距離を瞬間移動していくように見えるのだ。そのたびに近づいてくる。

もう目の前で、視界の半分を埋め尽くすほどだ。

ゆっくりと茎がたわみ、大きなつぼみが窓の正面まできた。

そして、巻きついた布がほどけるように花卉が展開する。花が咲く。

花らしくない。中心に、おしべやめしべが見えないのだ。

そのかわり、真っ黒な瞳孔と虹彩だけの眼がある。

瞳だ。

人間を一口で呑み込んでしまいそうな大きさだ。

まっすぐに麻衣を見た。

―とびらを、あけて―

声が聞こえた。

麻衣は左右を振り向いて、すぐ右手側にあるドアに手をやった。ここからスツールを持ち出したのだ。

ドアを開けると言っているのか。

―とびらを、あけて―
開けると、

そこは、豪華なキッチンではなく、薄暗い台所だった。

コンロやシンクが収められた、一体型の調理テーブルがある。もうあまり見かけない古いモデルだ。シンクには無理やり取り付けられた皿洗い機があり、よけいに狭苦しく見える。

見たことのある台所だった。幼い頃に何度も転居したせいか、麻衣にはここが故郷だと思える家がない。集合住宅が多く、どこも似たり寄ったりの間取りだった。

いま両親が暮らしている家ではない。麻衣が小学校四年生まで住んでいた家の台所のようなだった。冷蔵庫を開けておやつを探した記憶がある。共働きだったので、帰っても家には誰もいない。

見上げると、冷蔵庫には、麻衣が描いた両親の似顔絵が貼られている。ゴミ出しの予定表や、色褪せたレシピがマグネットで留められている。当時のまま……いや、この冷蔵庫は、次の引っ越し先には運ばれなかった。
だとすると。

まい、いるの、

急に、ドアを隔てた居間から声がした。

れいぞうこにはおやつはないのよ、いまからいっしょにかいにかい、
誰かいる。

まい、おいで、

祖母の声だ。そうだ、ときどき来てくれて、いっしょに買い物にいった記憶がある。

祖母は、この家から引っ越し前に交通事故で亡くなった。

居間に通じる木製のドアを押し開ける。
すると、

そこはオフィスなのだ。麻衣が勤めている会社の大部屋だった。雰囲気からすぐに

分かった。照明が煌々と点いた明るい部屋だ。壁面に浮かび上がる数字は、朝の十時頃を指している。

あんな時計あったっけ。

しかも、お昼前なのに誰もいない。

麻衣の机には、見知らぬ誰かの私物が載っている。パソコンが見当たらない。隣の席も、自分の知る同僚ではなさそうだ。

昨日の今日なのに、もうクビになったのか。

だが、グループごとにある課長席で、麻衣は自身の名札を見つける。慌てて近づくと、席に置かれた鞆には見覚えがないが、いかにも自分が選びそうなアクセサリーや文房具が置かれている。席に着いてみると、空中にカレンダーが表示された。

十年後の日付だった。

日付が急に点滅を始める。首をかしげて見ていると、声が聞こえた。

すぐにしよちようしつにきてください、

所長室は、大部屋の隅に設けられた個室にある。資料の配布で入ったことがあるが、

幹部会議が行われる打ち合わせスペースを兼ねていた。

すぐにきてください、

訳が分からないまま、麻衣は所長室の前まで進み、ドアを押し開く。

いきなり、視野が真っ白になる。

だんだん目が慣れてくると、麻衣は戸外に立っている。周囲には、半ば枯れた芝生が広がっている。肌寒い。抜けるような青空だが、乾いて冷たかった。冬空のようだった。

まいさん、そろそろかえりましょう、

前の方からからからと車椅子が走ってくる。声は車椅子から聞こえてきた。

きおんもひくいですし、おかげもしんぱいですからね、

車椅子はゆっくりと向きを変え、麻衣の正面に止まると車高を自動的に下げた。

おのりください、おへやまでおつれします、

わたしは病気なの。

いえいえ、おげんきですよ、それでもおとしをかながえて、おからだはだいじにな

さらないといけません、

車椅子は自走式の乗り物で、人が押す取っ手が無い。見たことが無いデザインだった。Elderly welfare facilities SH5とステンシルされていた。

老人、わたしは老人なのか。

掌をみると、見慣れないしわがいくつも刻まれている。

これはいいたい。

車椅子を無視して歩こうとすると、足は思うように動かなかった。もつれて倒れそうになったところを、抱き留めるように椅子の腕が延びた。

おはこびします、ごむりはきんもつです、

緩やかな坂を下ると、施設の建物が見えてきた。車椅子は入り口まで進むと、麻衣をそっと押しやった。

ここからはしつないたんとうにかかります、どあをあけておまちください、
ドアをゆっくりと開けた。

すると、

そこは窓の拡がるリビングだった。

窓からは白い花卉を付けた巨大な瞳がのぞいている。すぐ隣に、いつの間に来たのか、真紅の花弁が開いている。しかし、瞳は閉じていた。瞼なのか、白いスリットが見えるだけだった。

視野の大半を、植物なのか動物なのか分からない生き物が占めている。すぐ近くの高木を圧する大きさだった。

「おかえり、麻衣」

振り向くと、亮が腕を組んで壁にもたれている。

グレーのスーツを着て、グレーの革靴を履いている。ネクタイは派手な青だった。ふだん亮はノーネクタイだし、どうせ支給の作業服に着替えるからと、ラフな格好で通勤する。こんな高級そうなスーツは持っていない。

「なんで亮がいるの」

「おや、ここは麻衣の家なんだろう。だったら、おれがいてもおかしくない」

「これ、どういうこと」

「漠然とした質問だな」

「逃げられないって言ったのは亮でしょう」

「たしかにそう言った」

「こうなることを知っていた、だからそう言った。でも、どうして」

「残念だけど、おれは麻衣の知っている亮じゃない」

そう言うと、亮は口元を少しゆがめた。

麻衣は亮の顔をもう一度よく見た。服装はともかく、いつも見る亮と何も変わりはない。なかつた。

「おれは、麻衣に説明をするために、亮の姿を借りているだけだ」

「借りてるってどういう意味」

「アバターさ、化身、仮面、仮の姿」

「じゃ、だれのアバターなの」

亮は黙って窓の外を指した。

「あいつ、あいつって」

納得できないまま、麻衣は瞬きのない巨大な瞳に目をやる。

植物じゃないのか、人間と同じ知恵があるのだろうか。爬虫類や昆虫には知性の閃きはないが、哺乳類の眼にはあるという。だが、花卉の中央に開く瞳からは何も感じ取れない。

それが、亮の姿でしゃべっていると言うのか。

「とらるふあまど……」

「トラルフアマドール星人というのは、アメリカの作家が考えた架空の宇宙人のことだ。でも、名前なんてどうでもいい。フォーマルハウト星人のほうがよければ、そう呼んでも構わない。彼らのほんとうの名前は、人間の声帯では発音できないからな」
こちらに腕を突き出し、人差し指で麻衣を指す。

「しかし、きみはかれらから逃げられない。一切を知られているからだ」

亮はふだん本を読まない。外国作家の話を、あたり前のように口にする事となんてなかった。

「一切ってどういうこと」

「麻衣はいま見てきたじゃないか。二十年前、十年後、何十年後かの老いた自分、そういう一切だ」

「あれがわたしだとしても、全てじゃない」

だが、扉の向こうにいたのは、確かに麻衣のようだった。

「もし見たければ、いくらでも別の麻衣を見せてくれる。来年でも再来年でも、一昨年でも」

麻衣はぞっとする。

「もう、わたしの一生は決まってるの」

「ああ、そういう意味で言ったのか。だとすると答えはむずかしい。生まれてから死ぬまで、人の一生を決めるなんて、神でなければ無理だろう。フィクションのトラルファマドール星人は、確かにそんな存在だ。ヘプタポッドも、未来と過去を区別しない。でも、かれらはそうではない」

「どう違うの」

「麻衣は自分で一生を選択してきた。誰かが決めたわけじゃない」

「おかしいよ、それならなんで十年後や、お年寄りのわたしがいるの。未来は決まってるんじゃないの」

「ああ、麻衣は勘違いしている。あれは未来じゃない」

「じゃ、なに」

「きみが、過去の麻衣なんだ」

亮の説明は唐突で、理解を拒絶する。

「かれらはきみを観察してきた。きみの生活を逐一、ひとつ残らず見続けてきた。観察する目的はいろいろあるが、麻衣がどうか、人が納得できる理由はない。そういうものだ、と思うほかない。しかし、きみの一生は残念ながら終了してしまった。人間には寿命があるからね。不幸な生涯ではないと思う、きみたちの時代の基準で見たらだが」

「終了したのなら、なんでわたしがいまいるの。わたしはまだ三十代で……」

「一生という時間が終わった時点からみれば、いまのきみは過去にいる」

「わからないよ」

「こう考えてみよう。人の一生を描いた演劇があるとすると。上演は一回きりしかない。その一回が終わる。しかし観客からカーテン・コールを求められる。そこで、劇の中間ころの若い主人公が、ふたたび登場して挨拶をする」

「ちよっと待って、比喻ならともかく、人の一生は演劇じゃない。どうやって一生を観察するの。しかも、どうしてわたしなの」

「倫理の問題がある。奇妙に聞こえるかもしれないが、万能のかれらにも倫理規範がある。観察対象は厳しく制限されている。きみの言う通り、観察のためには、すべてをモニタ出来る環境の中に入れる必要があるからだ。でもね、麻衣、きみにはその制限があてはまらない」

「なぜ」

急に寒気を感じる。

「きみは生物的には生きていないからだ。生きていないのだから制限対象ではない」

亮は、両手を大きく広げて見せる。

「麻衣は十歳で物理的に死んだ。憶えてはいないだろうけど、お祖母さんの運転する

車の事故で死んでいる。死の直前にサンプリングされて、数値に転写された。アナログからデジタルだ。きわめてシームレスな移行なので、認識できなかったろう。数値生命の観察は倫理的にも許される。もともと生きていた環境が、数値上にそのまま再現される。数値生命の麻衣が成長してきた世界と体験は、たぶん生物であった麻衣が体験するはずだったものと、まったく同じだろう」

…：何かを思い出しそうになる…：

そうだ、祖母の自動車だった。買い物に行く途中…：だが、その瞬間は記憶にはない。

「この世界全部が作られたもの」

「全部といっても、きみの周り、壁の中までだ。きみが移動できる範囲だけが、数値的に作られる。だとしても偽物ではない、麻衣にとっては本物だ」

「じゃ、なぜいまになって壁が分かるようになったの」

「カーテン・コールだからね。きみは演劇とは知らないで一生を終えた。今回は違うんだ。裏舞台の何もかも知った麻衣は、もとの世界の一段上位にある階層に引き上げ

られた。きみは自分が俳優だと知っている。ここが、きみの新しい舞台なんだ」

亮は微笑みを浮かべる。

なにを笑っているのか、麻衣が声を上げようとすると、湯気のような空気の揺らめきが見えた。亮の全身が水蒸気に包まれている。音はしないが、赤い光の明滅が靄の奥にあった。

「あきら……」

見るまに、水蒸気は霧散した。後には何も残らなかった。絨毯には、濡れたあとの染みがある。それも、ゆっくりと薄れていった。

窓に目をもどすと、背景の空は夕暮れに染まりはじめている。

そして、赤い花の瞳が開いていた。

真紅の瞳孔だった。虹彩もまた薄い紅色に彩られていた。

白と赤、黄昏に沈んでいく二つの眼からは、感情が一切欠落していた。

亮の言うとおり、舞台を作ったのがあいつらだとしても、では自分になにが期待されているのか。

麻衣は、亮の言葉を思い出す。

カーテン・コールの役者が挨拶を終えたら、次になにをするのか。舞台から退出して消え去るのか、それとも、新たな劇をはじめなのか。

喉が渇く。

麻衣は、キッチンのドアをさぐる。逃げるように駆け込むと、冷蔵庫の扉を開いた。中は空だった。

食品も飲料もなく、買ったばかりの清潔なプラスチック庫内を、白い灯が照らしている。その正面の網棚に、一枚の画用紙が入っていた。

そっと手を入れ、取り出してみる。

小学生が描いたような絵だった。

ドアの向こうで見た麻衣の両親の絵ではない。自分が描いた覚えはない。中央に、一人の人物の顔が、クレヨンで描きなぐられている。

これは、わたしだ。

絵の中の麻衣は、乱れた長い髪を風になびかせている。

ただ、髪は真紅に塗られている。

赤いクレヨンで、何度も何度も執拗に重ね描きされ、麻衣の顔を蔽い隠している。風に流れる髪のはざまから、絵の中の麻衣は目を見開き、こちら側の麻衣を見据えている。

その瞳は、あざやかな紅に塗られていた。